No.174
2014.
3.31

岐阜の博物館

編集兼発行
〒501-3941 関市小屋名
（岐阜県百年公園内）
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

これからの博物館・美術館の目指すべきは

伊藤　嘉章（東京国立博物館学芸研究部長／土岐市出身）

昭和60年に私が学芸員となった頃からすると、博物館、美術館、資料館などを取り巻く状況は大きく変わってきました。バブルの時代には、公立の館を中心に各地で博物館・美術館の建設が行なわれました。週休二日制や「ゆとり教育」で、博物館は社会教育の場として大きく取り上げられた頃は、追い風の時代でありました。それが現在では、予算と人員の削減の嵐が吹き荒れ、指定管理者制度といったものも始まっています。こうした中で、それぞれの館が必死の努力をしている、これが現在の状況です。

東京国立博物館も、大きく変わってきました。象徴的なのが、日本の古美術の展示をする本館のあり方です。その変化のキーワードは「分りやすく」というものでした。

かつての東博の展示は、絵画、書跡、彫刻、陶磁、漆工など分野別に部屋が分れ、それぞれが独立して展示が行なわれていました。現在の東博では、本館二階に「日本美術の流れ」という展示があり、そこでは縄文時代から江戸時代までの日本美術の大きな流れをいくつかのテーマに沿って構成することで通観していただけるようになっています。これは、より多くの人に楽しんでいただけるようにという考え方によるものでした。

こうした変化は、東博が独立行政法人へ移管した頃に重なります。そこでは、例えば入館者数の目標を定め、それに対しての評価が行なわれるようになりました。予算的にも厳しさを増し、その中で、より多くの人々に楽しんでいただける場となることが求められたのでした。

21世紀に出来た博物館、美術館の中に、予想以上の入館者数を記録して話題となった二つの館があります。平成16年（2004）夏に開館した金沢21世紀美術館と翌年に開館の九州国立博物館です。この二つの館の共通点が「フリーゾーン」です。入館料を払うこと無しに、館に入って楽しむことができるエリアがあり、それが多くの人を集わせることになっています。この二つの館では「フリーゾーン」が見事に機能して、多くの人を引き付けているのです。

九博では巨大な屋根に覆われたエントランスホールがあり、このエントランスホールとミュージアム･ホールとで様々なイベントが展開されています。「あじっぱ」という親子で体験できるワークショップスペースもフリーゾーンの中に含まれています。21世紀美術館では、あの有名な「プール」の展示も、フリーゾーンからその一部を感ずることができるのを始めとして、魅力のあるフリーゾーンが展開しています。

博物館、美術館が、展覧会を観に行く場、あるいは講演会を聞きに行く場というだけではなく、「そこに行けば、何か楽しい」ということが、多くの人を引き付けており、それが展覧会の入館者にもつながっているように思います。

博物館、美術館や資料館。それぞれに館独自の役割があります。その一方で、共通のこととして、人が集う場であることが大事な時代となっています。人が集うことなしに、どんなに素晴らしい活動がそこにあっても、誰もそれを享受することができません。館の活動を支え、発展させていく力をどうやって勝ち得ていくか。考える時代が来ています。

第38回
東海三県博物館協会
研　究　交　流　会

期　日：平成25年9月12日（木）
場　所：三重県立美術館　講堂

三重県・愛知県・岐阜県の博物館協会合同で行われた研究交流会の概略を報告します。

館内オプションツアーと研究交流会の二部構成で、今年４月に開館する三重県総合博物館を事前に見学できるまたとない機会となりました。

↑足元のガラス下にミエゾウの足跡化石、その奥に全身骨格標本が来館者を迎えるように立つ予定です。

開館日と愛称「MieMu」（ミエム）が決定し、展示造作と資料の引っ越しが始まったばかりの真新しい館内を、館長以下の案内で、展示室と収蔵庫などバックヤードを中心に見学しました。収蔵庫を包み込むという設計思想のもと、外壁に接しないように建物中心部に設けられた巨大な収蔵スペースが建物の核になります。公開エリアは交流と展示のスペースに分かれ、前者は会議室や資料閲覧室など、常時にぎわう空間が想定されていて、人々が行き交う新博物館の様子が目に浮かぶようでした。

研究交流会では、「地域の博物館協会の意義」と題して、各県博物館協会の概要報告及び報告者と三県博協事務局の座談会が行われました。各県とも体制や事業は似通っていて、座談会からはその悩みも共通することがうかがえました。キーワードとして、「資金」「人的ネットワーク」「ブランド力」が挙げられ、いずれも各館のネットワーク構築が要といえそうです。最後に一言。三重・愛知に比べ、岐阜県からの参加が少なく残念でした。機会をとらえてネットワーク拡大に努めたいと思います。

（岐阜県博物館　南本有紀）

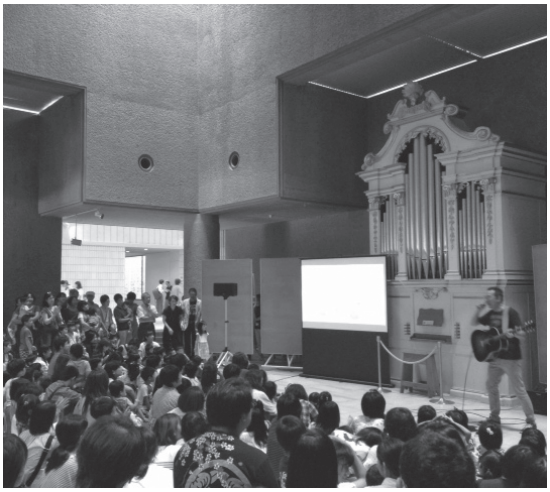
第136回公開講座
さんしろう絵本ライブ@ミュージアム

期　日：平成25年6月29日（土）
会　場：岐阜県美術館
参加者：656名

岐阜県美術館多目的ホールにおいて、杉山三四郎氏を招き、【「やなせたかしと『詩とメルヘン』のなかまたち」展　特別講座 さんしろう絵本ライブ@ミュージアム】を行いました。同企画展は、アンパンマンの作者として知られるやなせたかしの足跡をたどり、また自身が責任編集者をつとめた雑誌『詩とメルヘン』に関わり挿絵を描いた作家たちを紹介しました。本公開講座は、開催中の企画展の特別講座として位置づけ、杉山氏による絵本の読み聞かせライブとして実施しました。

杉山氏は岐阜市内の絵本専門店を経営しながら、東海圏の図書館や児童館等でも同様の企画を多く行っています。当日は仮設スクリーンに絵本を写し、杉山氏のギター演奏にのせて「ぶきゃぶきゃぶー」等計８冊の絵本を読み上げました。使用した絵本には、開催中の企画展の出展作家の作品も含まれました。

当日は早くから来場者が訪れ、開演30分前には座席の半数近くがうまるほどの集客で、予想集客の３倍近くの656名が来場しました。杉山氏のユーモア溢れ、手拍子や一緒にせりふを読み上げることをうながす演出に、未就学児から年配の方まで、大いに盛り上がりました。



（岐阜県美術館　奥村真名美）

第137回公開講座
高山陣屋文書から学ぶ

期　日：平成25年9月29日(日)～12月15日(日)
会　場：高山陣屋
参加者：46名

『高山陣屋文書から学ぶ』と題し、高山陣屋文書を読み解きながら、往時の高山陣屋が果たしてきた役割や、この文書から飛騨の人々の暮らしの一端を学ぶ全４回の講座が開催されました。

９月29日（日）に行われた第１回講座の講師は下畑学芸員（元岐阜県博物館長）、奥原学芸員が勤めました。

古地震学は文理両道です。学際的学問「古地震学」は自然科学から人文科学までに及びます。古地震学の始まりは濃尾地震と根尾谷断層からです。意義は①過去の地震の地震学的研究②災害予測・危機管理（防災・災害復旧のヒント）つまり過去を今に生かすことにあります。かつて安政五年飛騨北部は大地震（マグニチュード７）に見舞われ、建物の全半壊 709 件、死者 203 名等の大きな被害を出しました。

講座では、高山陣屋文書の中から、『飛州村々地震一件』などの古文書を取り上げ、文書を手掛かりに、代官所の震災対応や地震の特徴について、科学的に読み解いてみるというものです。被害状況の調査やコメなどの支給を行った震災当時の代官所の危機管理態勢が読み取れることなどを紹介していました。

（光ミュージアム　吉井　隆雄）

第138回公開講座
薬として岡山藩から徳川幕府に献上された魚の耳石

期　日：平成25年11月16日（土）
会　場：内藤記念くすり博物館
参加者：43人

「内藤記念くすり博物館」では、毎年のように講演会を開き、薬に関する情報を発信しています。今年は、魚の耳石研究に携わる大江 文雄先生をお招きし、江戸時代に耳石が強壮剤として用いられていたこと、また、それが分かったいきさつなどを紹介され、併せて耳石の一般公開がなされました。

耳石とは内耳にある平衡感覚を司る器官で、炭酸カルシウムの結晶からできています。魚の種類ごとに形や大きさが異なるため、耳石を見れば、魚の種類や体長、さらに年齢までもを知ることができます。この耳石が添え書きと共にくすり博物館に保存されており、これらを大江先生らが調査されました。その結果、かつて耳石が飲み薬として用いられていたこと、魚はホンニベとオオニベの２種類であること、魚の体長は1.6mに達するものであったことなどが明らかになりました。展示したニベ耳石は、大きさ、数とも例をみない規模で、現在ほとんど入手が不可能な希少なものであることが分かりました。

会場に訪れた参加者は、耳慣れない耳石の話に熱心に耳を傾けながら、くすりの歴史の奥深さ、面白さについて学び、皆、満足のいく表情で会場を後にしました。

（世界淡水魚園水族館　堀江　真子）

第83回会員研修会
ボランティアの現状と課題
― 県内の事例から ―

期　日：平成26年１月21日（火）
会　場：美濃加茂市民ミュージアム
参加者：18名

近年わが国の博物館界では、生涯学習、市民参加、地域との連携などの関連で、ボランティア活動がいっそう重視されるようになりました。本研修会でも、以前ボランティアを取り上げたことがありましたが、その際にも、ボランティア活動が館ごとに多様であることがわかってきました。

このような観点から、第83回及び第84回の会員研修会は、連続してボランティアをテーマとして研修を行うことになりました。今回は、県内の事例から、ボランティア活動の現状と課題について交流を行いました。

事例については、３館より報告が行われました。

○岐阜県博物館　西谷　徹
「ボランティア・コーディネーターの必要性」
○岐阜県美術館　谷口　輝己
「岐阜県美術館のサポーター活動について」
○美濃加茂市民ミュージアム　長谷川　明子
「みのかも文化の森 ボランティアについて」

事例では、活動の種類ごとにサポーターのグループ分けを行ったり、運営方式に関して自主運営方式の場合と組織化しない場合があったりすることが挙げられました。また、サポーターの部屋を設けたり、日誌などを記録したりするなど、サポーターが活動しやすい環境づくりへの配慮が必要であることが報告されました。

その後の意見交換では、ボランティア全体の研修や統率に関してや、自主運営組織の事例、ボランティアの間での意識の差、職員間での意思統一の難しさなどについて交流がなされました。

本研修を通じて、自分の興味・関心を満たすためというボランティアの意識と、社会貢献のためというボランティアの意識をどう両立させて運営していくのかが共通の課題として明らかになりました。

（岐阜県博物館）

館・園紹介　No.150

岐 阜 市 科 学 館

〒500－8389　岐阜市本荘 3456－41
TEL：058－272－1333
ＨＰ：http://www.city.gifu.lg.jp/8307.htm

岐阜市科学館は、岐阜市教育委員会管轄の科学館で、県内では唯一の総合科学館です。

岐阜市科学館では、教育活動に力を入れており、各種講座を多数開催しています。多くの講座が抽選になるほど人気があります。特に、小学校低・中学年の児童と保護者で参加する講座は、人気がとても高くなっています。

プラネタリウムでは、子どもたちが声を出して星を見つけられる「キッズタイム」や、音楽とともにゆったりと星空を眺める大人向けの「アリオンタイム」、生解説だけの「星空タイム」など、広く市民の方に楽しんでもらえるプログラムを用意しています。

屋上には天文台があり、50cmの反射式望遠鏡があります。土日、祝日には、天気が良ければ太陽黒点や金星などを見ることもできます。

イベントも多く開催し、毎年夏には特別展を開催しています。また昨年度から、岐阜市文化センターにて「ぎふサイエンスフェスティバル」を開催し、50を超える実験・工作・展示ブースを体験したり、ノーベル賞受賞者のお話を直接聞いたりすることができます。

（岐阜市科学館　都築　幸夫）

館・園紹介　No.151

海津市歴史民俗資料館
学ぶ機会の拡大をめざして

〒503−0646　海津市海津町萱野 205−1
TEL：0584−53−3232
ＨＰ：http://www.city.kaizu.lg.jp

古来より水との戦いが続けられてきたこの地の歴史と暮らしを伝えるのが、当館の使命です。例年約２万人の児童生徒の見学が主な来館者ですが、館内展示の充実と同時に積極的に地域に出かけて学ぶ機会を提供していくことも大切にしています。

新しく当地に赴任した先生方への輪中関係の史跡研修、市内教員対象の夏期現地研修等、教育委員会と連携して毎年実施しています。

その他地域の方々から好評を得ている事業が、年２回の「わくわく歴史探訪」です。昨年度は「宝暦治水と明治改修工事」をテーマに、大榑川洗堰跡と石田猿尾（羽島市）・佐屋川廃川跡（稲沢市）、さらに上石津の高木屋敷（歴史民俗資料館）へも市のバスで出かけました。今年度も同じテーマで、御囲堤跡と佐屋川河川敷跡、天王川公園（津島市）へと現地研修を重ねてきました。

「現地に出かけて、とてもよくわかった」、「ここで暮らしてきたのに、初めて知る事ばかりで感激した」、「次回も参加したい」と参加者の満足度が伝わってくる結果でした。

課題は応募者が多くても、バスの都合で人数を制限しなければならないことです。より多くの皆さんの希望に添えるよう改善に努めたいと考えています。

（海津市歴史民俗資料館　加藤和保）

館・園紹介　No.152

中山道みたけ館

〒505−0116　可児郡御嵩町御嵩1389−1
TEL：0574−67−7500
FAX：0574−68−0005
ＨＰ：http://www.town.mitake.gifu.jp/mitakekan/

中山道みたけ館は、旧中山道「御嶽宿」本陣に隣接する地に1996年に開館した複合文化施設です。１階が図書館、２階が郷土資料を紹介する郷土館という配置になっています。郷土館の常設展示では、貴重な自然史資料のほか、御嶽宿と伏見宿を中心とした中山道の紹介、政治や産業の中心地として隆盛をきわめた近現代の歴史を展示しています。また企画展示室では、地域の身近な歴史や、美術作家の作品を計画的に年に数回展示しています。また、館では展示だけでなく博物館としての根幹的な仕事である収集資料の整理調査活動を地道に進めています。

みたけ館の付属施設として「中山道御嶽宿商家竹屋」があります。これは本陣･野呂家の分家が経営していた明治10年頃の商家を公開しているものです。質素ながらも風格のある造りは江戸時代の様式を色濃く残しており見ごたえがあります。

みたけ館界隈は、重要文化財・願興寺などもある歴史的風致地区であり、休日を中心に町外の観光客で賑わいます。中山道みたけ館は住民の生涯学習施設であるとともに地域の観光拠点としての機能も果たしています。

（美濃加茂市民ミュージアム　可児光生）

館・園紹介　No.153

岩村歴史資料館

〒509−7403　岐阜県恵那市岩村町98
TEL：0573−43−3057
ＨＰ：http://www.city.ena.lg.jp/machi/culture_sports/iwamura-shiryoukan/

岩村町八百有余年の歴史をおさめる岩村歴史資料館は、日本三大山城の１つに数えられる岩村城の麓、藩主邸跡にあります。この資料館は文化庁の歴史民俗資料館設置要領に基づく補助金を受け、1972年（昭和47年）全国で４番目の館として開館しました。建物は高床式、入り母屋づくりの屋根、白壁造りで城を思わせる外観です。館内では県重要文化財「享保3年岩村城絵図」、「明和３年岩村城平面図」、「佐藤一斎自讃画像軸」をはじめとする多くの岩村城、岩村藩関係史料を収蔵展示し、併設する民俗資料館では先人の生活をしのばせる数々の民具を展示しています。資料館とともに移築整備された藩校知新館の正門、復元整備された藩主邸跡正門、太鼓櫓、御殿茶室なども見どころです。

なお恵那市では平成23年（2011）には岩村藩が輩出した幕末の儒学者佐藤一斎の三学の精神（少、壮、老と生涯学び続ける）を理念とした生涯学習都市「三学のまち恵那」宣言が制定され、三学のまちの推進、生涯学習活動(市民三学運動)の支援に取り組んでいます。実際に岩村町を訪れると、郷土の先人の知恵がいまも人々の生活の中に息づいていることを示す町づくりが行なわれています。

岩村歴史資料館へは、電車では明知鉄道岩村駅から徒歩20分の場所にあります。その道すがら、古い町並みの家々の軒下に佐藤一斎の『言志四録』を刻んだ木板が掛けられ、佐藤一斎の名言とその解説を読むことができます。そこに暮らす人々だけでなく、訪れる人々の心も豊かにする町並みからも、郷土の先人を顕彰する資料館の存在価値を感じられます。

（中山道広重美術館　福田訓子）

館・園紹介　No.154

高山祭屋台会館

〒506−0858　高山市桜町178番地
TEL：0577−32−5100
FAX：0577−32−0339

当館は日本の三大美祭のひとつに数えられる高山祭の屋台（国・重文）を展示公開し、多くの人々に見ていただこうと昭和43年に開館し昨年45周年を迎えました。平成７年にはより一層の保存環境を整えるために新屋台会館が建設され、温湿度はもとより照明等にも細心の注意が払われました。

また昭和61年の高山市の国際観光都市宣言、平成７年の白川郷のユネスコの世界遺産登録、加えて平成21年にはミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで高山市が三ツ星を獲得し、当館は二つ星を獲得しました。そういった好条件も重なって海外からの観光客数は年々増加し、今では年間約２万人もの外国人観光客が来館されます。国別の統計もとっていますが、聞いたこともない国名が飛び出し、地図で探すとフランスの南の方に接している小さな国だったり、聞き慣れない島の名を言われ、探すとフランスとイギリスに挟まれたイギリス海峡に浮かぶガンジー島と言う小さな島だったり、日々高山に居ながらにして世界中の人々との一期一会に戸惑いながらも職員全員が英語での応対にトライしています。

また特別展示室では『秋葉講火消用具と末社秋葉神社社殿　資料展』を開催しています。享保・天明・天保年間の度重なる大火から人々を守る為に秋葉講を結成し、火消し装束を身にまとい果敢に取り組んだ人々の勇姿と努力と奮闘の跡をご覧いただくことができます。

（高山祭屋台会館　瀬木登美子）